慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『百科全書』第一趣意書の重要性 : チェンバーズ問題解明のために
Sub Title	Sur l'importance du premier Prospectus de l'Encyclopédie : une mise au point des problèmes de Chambers
Author	鷲見, 洋一(Sumi, Yoichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.318(167)- 334(151)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0334

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『百科全書』第一趣意書の重要性

——チェンバーズ問題解明のために——

鷲見　洋一

I　『百科全書』の初期段階

フランス『百科全書』の前史と呼ばれる部分については，いまだに不明な事柄が多い。調べていくと，そのあまりの複雑さに呆然とするほどである。まず念のため，現在，研究者の間で定説となっている初期の事実関係を年表形式で確認しておこう。

1745年1月　：ドイツ人ゼリウスがパリの出版業者ル・ブルトンに英国のチェンバーズ『サイクロピーディア』の仏訳の話をもちかける。

1745年2月　：ゼリウスは「金満家」の英国人ミルズと組むことになり，『サイクロピーディア』に改訂・増補を加えた，本文4巻，図版120点の仏訳版を企画。

1745年3月26日：ル・ブルトン，翻訳出版のための国王允許を獲得。『趣意書』の配布。

1745年5月　：『趣意書』に対する『トレヴー評論』誌の好意的記事。

1745年8月28日：ル・ブルトンとゼリウス，ミルズとが決裂。

1745年8月末　：国務顧問会議，契約と允許を取り消す。ル・ブルトン，出版企画を練り直し，パリの同業者3名（ブリアッソン，ダヴィッド，デュラン）と協同出版社を結成。この頃から会計帳簿が作成される。

1745年10月18日：ル・ブルトン，国王顧問会議から最初の允許の破棄を無

効とする決定を獲得。

1745年12月　：会計帳簿にダランベールの名前。

1746年1月21日：国璽尚書ダゲッソー，允許を更新。

1746年2月　：会計帳簿にディドロの名前。

1746年3月3日：ル・ブルトン，親方＝印刷業者として認められる。

1746年6月27日：協同出版社，コレージュ・ド・フランス教授グワ・ド・マルヴェース神父を編集主幹とする契約を結ぶ。ダランベールとディドロは証人として署名。

1747年8月3日：グワ・ド・マルヴェースとの契約破棄。

1747年10月16日：ダランベールとディドロがマルヴェースに代わって編集担当となる。

1748年4月30日：協同出版社，新しい出版允許を獲得して，新規に拡大された出版企画を立てる。

以上の4年間にわたる事実経過は，一言で煎じ詰めれば，出版業者ル・ブルトンによる英国のイーフレイム・チェンバーズ『サイクロピーディア』の仏訳企画が，まずはドイツ人ゼリウス，英国人ミルズという外国人を迎えてから，ついで二人を排除。次にフランス人聖職者グワ・ド・マルヴェースを迎えてからこれまた彼を排除。最後に若いフランス人ダランベールとディドロを編集主幹に迎えるまでの経緯を辿っている。この経緯は今世紀初頭以来，すべての『百科全書』研究者が認めているものである[(1)]。

II　チェンバーズの役割

ところで，以上の諸事実を裏付ける諸家の研究で決まって強調されるのは，1748年の新しい允許獲得以降，出版業者のル・ブルトン，編集担当のディドロたちが徐々に英国のモデルを離脱し，チェンバーズを質量ともに遙かに上回るフランス独自の大百科事典を完成させるに至ったという「結果」である。その際引き合いに出されるのは，フランス人側のかなり勇ま

しく，悪く言えば大風呂敷を広げたと形容できなくもない一連のマニフェスト，すなわちディドロの筆になる『第二趣意書』であり，ダランベールが起草した本文第1巻の巻頭を飾る『序論』であり，さらにはディドロが執筆した項目《百科全書》なのである。たとえば，1751年に刊行した『第二趣意書』の中で，ディドロはチェンバーズを批判しながらこう言っている。

> En effet, conçoit-on que tout ce qui concerne les Sciences & les Arts puisse être renfermé en deux Volumes *in-folio* ? La Nomenclature d'une matière aussi étendue en fournirait un elle seule, si elle était complète. Combien donc ne doit-il pas y avoir dans son Ouvrage d'articles omis ou tronqués ?
>
> Ce ne sont point ici des conjectures. La Traduction entière du Chambers nous a passé sous les yeux, & nous avons trouvé une multitude prodigieuse de choses à désirer dans les SCIENCES ; dans les ARTS LIBÉRAUX, un mot où il fallait des pages ; & tout à suppléer dans les *ARTS MÉCANIQUES*[2].

この文章は，ディドロたちが英国の先達に多くを負いながら，*in-folio* 版2冊本のチェンバーズを超え出て，はるかに大規模な百科事典構想を打ち立てたという事実を裏打ちするものとしてよく引き合いに出されるのだが，振り返って考えてみると，大『百科全書』の準備・制作過程で，小型モデルの『サイクロピーディア』が完全に放棄されたという形跡はまったくない。《La Traduction entière du Chambers nous a passé sous les yeux》とディドロが言明している以上，準備過程のある時点で，『サイクロピーディア』のフランス語訳はほぼ完成していたと考えられる。普通，モデルにした書物がいかに不備なものでも，新しい拡大企画の中でモデルそれ自体が完全に黙殺されるという事態は稀であろう。モデルに増補や改良を加え，またかなりの部分はそのまま活かすケースが多いのではないだ

ろうか。ではディドロたちは出来上がった『百科全書』本文の中で，いったいどの程度までチェンバーズの原文を温存しているのか。フランス版『百科全書』の中で『サイクロピーディア』が占める割合とはどれぐらいのものなのだろうか。

実はこの素朴な疑問は，John Lough がすでに1980年に発した問いなのである[3]。英国の優れた『百科全書』研究家がこの短い論文で提起しているのは次の二つのことである。1）ディドロたちのハイトーンな言明にも関わらず，『百科全書』にはチェンバーズ『サイクロピーディア』からの直接・間接の引用や翻訳の跡が多数残存する。とりわけあまり内容のない小項目にそれは著しい。だが，この問題はそれこそ気の遠くなるような照合作業を経て初めて明らかになるものであろう。2）現代の研究者が『百科全書』の項目から引用する場合，とりわけチェンバーズの該当項目の英語原文を参照してからでないと，ひどい誤りを犯す危険がある。ラフはそのような不注意な誤りの好例として，Vladimir R. Rossman による項目《L'Onomancie》に関する論文を槍玉に挙げている[4]。

次に問題になるのは，初期の企画段階でチェンバーズからの翻訳草稿が残されている唯一の資料として，ル・ブルトンが1745年に印刷・配布した『第一趣意書』が存在することである。普通，『百科全書』の趣意書といえば，ディドロが執筆した1751年のものを指し[5]，現在刊行中のディドロ全集にも収録されているが，ディドロやダランベールが企画の中心的存在として登場する以前の，まだフランス版『百科全書』が英国の『サイクロピーディア』の単なる翻訳企画に過ぎなかった時期に公表された『第一趣意書』こそ，Lough が20年も前に提唱した英仏両版の比較照合作業の要になるべきテクストであることは明らかであろう。何故なら，1745年の『第一趣意書』には，近く刊行されるチェンバーズ仏訳版から四つの項目が選ばれ，その試訳文が見本として掲載されているからなのである。

ところが，ここに大きな難問が横たわっている。かくも重要な『第一趣意書』のオリジナルが，数年前まで世界のどこにも存在しなかったという，書誌学上の物理的障害である。唯一の例外はバルティモア大学で，同

大学の Douglas H. Gordon と Norman L. Torrey が1947年に刊行した書物の中に簡単な記述とタイトルページの復刻があるが[6]，その後の目覚ましい『百科全書』研究の充実深化にも関わらず，諸家がこの『第一趣意書』を話題にする際は，常に Gordon と Torrey の共著への単なる参照に留まり，バルティモア大学所蔵のオリジナルを誰かが直接閲覧したという形跡は全くない。『第一趣意書』オリジナルの希少性は世界の古書市場でも有名なものらしく，先ほどの John Lough はすでに30年も前にこれに言及し，1751年の『第二趣意書』のオリジナルですら入手が困難である事情に加えて，『第一趣意書』についてはバルティモアの Douglas H. Gordon 氏の好意にすがるしかないと述べているほどなのである[7]。それにつけても奇妙に思えるのは，その Gordon 教授にしてからが，大学図書館でいつでも参照できる筈のこの貴重な文献についてその後論文らしいものを一切発表していないことである[8]。さらにもっと不思議なのは，この Lough 教授の論文より40年前に書かれた Joseph le Gras の書物では，『第一趣意書』はパリ国立図書館に収蔵されていることになっている事実である[9]。John Lough が既出の1969年に発表した論文で，このことに一切触れていないのも納得がいかない。

厄介な難問はもう一つある。チェンバーズの『サイクロピーディア』は初版が1728年であるが，人気を博したお陰で何度も版を重ねた。フランスで『百科全書』の『第一趣意書』が配布された1745年までに，『サイクロピーディア』は少なくともロンドンで5版を重ねたことが分かっている。ところが，戦後フランス，英国，アメリカを中心に進められた『百科全書』研究には，初期のゼリウスやミルズ，そして途中から編集者として登場するディドロやダランベールが，果たして『サイクロピーディア』のどの版を使用したかということが明記されていないのである[10]。John Lough 教授ですら，先に紹介した1980年の論文で，Vladimir R. Rossman を批判しながらも，Rossman が本来典拠とすべきだった筈の『サイクロピーディア』の版本がどれなのかをまったく明らかにしていない。うっかりすると，Lough でさえもが，ディドロたちの使用したチェンバー

ズの版本は，比較的入手の容易な1728年の初版本だったと素朴に信じているかに見えるほどなのである。

III　チェンバーズ問題に関する既存の研究概観

さて，フランス『百科全書』の初期段階，とりわけ筆者が仮に「チェンバーズ問題」と呼ぶ問題に焦点を絞り込んだ業績として，若干の資料，書物や論文がある。

まず，同時代の証言として見逃せないのが，後にル・ブルトンたち出版業者を訴え出た予約購読者の一人である Luneau de Boisjermain による覚え書きであろう(11)。この裁判資料の冒頭で Boisjermain は『百科全書』前史の詳細を回顧し，とりわけフランスの出版事情に暗い英国人ミルズが狡猾なル・ブルトンにまんまとチェンバーズの翻訳権を奪われた経緯を物語っている。

それによると，1745年における国王允許取得直後に，すでにル・ブルトンの手許には翻訳原稿があったことになっている(12)。これが完成原稿であったかどうかは判然としないが，とにかく英国事典の *in-folio* 版 2 冊本全文が，この時点でフランス語に移されていたとだけは断定してよさそうである。

さて，『百科全書』前史に関する名著という誉れ高い Franco Venturi『百科全書の起源』（イタリア語初版1946年）であるが，Venturi はまず18世紀初期の技芸協会とフリーメーソンにおける技芸事典編纂の試みと挫折について略述してから，ドイツ人のゴットフリート・ゼリウスと英国人のジョン・ミルズによるチェンバーズ翻訳企画の経過説明に入る。「彼らはチェンバーズの純粋なたんなる翻訳を考えながら仕事をはじめた」(13)。1745年 2 月17日の契約によると，ゼリウスが翻訳，ミルズがゼリウスに月150リーヴル支払い，かつ不定期に朱入れ作業を行うことになっていたが，すでにミルズの頭には「英語版『百科全書』を補いふくらませ検証しなければならないという考えが生まれていた」(14)。この Venturi の調査からは，この直後に刊行された『第一趣意書』に掲載された 4 項目の訳文が，

おそらくはゼリウス一人のもの，またはミルズか別人の手の入ったゼリウスの作であることが読みとれる。ただこれだけでは，訳出された4項目がチェンバーズ『サイクロピーディア』のいずれかの版からの逐語訳であるのか，あるいはすでに増補や改訂をほどこされた段階のものであるのかは判然としない。Venturiはその後，出版業者ル・ブルトンと外国人二人との間の軋轢を説明し，国務顧問会議が出版許可をいったん取り消すまでの経過を述べるが，例の『第一趣意書』についても，その頃二人の外国人が翻訳底本にした筈の『サイクロピーディア』の版本についてもまったく言及していない。

25年後，John Loughは詳細な資料を使ってゼリウスとミルズの人物調査を行い，とりわけ問題の『第一趣意書』に掲載された4項目の翻訳について，ル・ブルトン自身の証言を引用している。それによると，ゼリウスのフランス語訳はあまりにも拙劣だったので，ミルズはル・ブルトンと相談して，事典全体の翻訳については「他の翻訳者たち」に任せようということを取り決めたらしい。ここでも，『第一趣意書』のフランス語訳がどこまでゼリウスの手になるものかは分からず仕舞いであるし，翻訳底本についても不明である(15)。

次の研究段階は1980年代である。研究誌 *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century* 1巻をすべて使った，Frank A. Kafker監修になる共同論文集 *Notable Encyclopedias of the Seventeenth and Eighteenth Centuries : Nine Predecessors of the Encyclopédie* の中で，Lael Ely Bradshawはチェンバーズの『サイクロピーディア』について一文を寄せるが，これは英国辞書の本格的な内容紹介であるにしても，フランス『百科全書』との関わりについてはほとんど何も教えてくれない(16)。監修者Kafker自身の論文についても同様である(17)。

1987年，比較文学者のCharles Dédeyanはディドロと英国思想という観点から研究書を刊行し(18)，第1章中にチェンバーズに関してわざわざ1節を設けている。そして，1751年の『第二趣意書』におけるディドロの例の文言（La Traduction entière du Chambers nous a passé sous les

yeux）にやはり着目して，こう述べている。

〔...〕cette phrase est énigmatique : Diderot a-t-il outre le texte anglais une traduction manuscrite de l'abbé de Gua en français, ou fait-il allusion à la traduciton italienne du Chambers[19]?

Dédeyan 教授の提起する「謎」自体がよく分からないといえなくもない。ディドロが所有する le texte anglais がチェンバーズの何版かという問題提起がないし，さらにチェンバーズのイタリア語訳が突然引き合いに出されねばならない事情も不明である。

1980年代の『百科全書』研究史を締め括る総括的試みとして注目された国際シンポジウム *L'Encyclopédisme* はその幅広い領域設定で各方面の注目を集めたが，チェンバーズ問題をめぐっていくつか報告がなされた。中でも『サイクロピーディア』についてもっとも詳しい報告をしている Stephen Werner の場合でも，チェンバーズの「近代性」は力説するものの，フランス『百科全書』との比較の意図はなく，末尾でディドロのチェンバーズに対する負債を略述するに留まっている[20]。

総じて「チェンバーズ問題」は，今世紀前半期からさまざまな研究家によって取り上げられながら，どこか画龍点睛を欠く扱われ方をしてきた観が否めない。それというのも，チェンバーズ『サイクロピーディア』の版本数種を『百科全書』との関連で比較照合する発想が，これまでまったくなかったこと，さらに『百科全書』側の初期段階に光を当てるべき決定的資料である『第一趣意書』をまともに検討した者がいなかったという，どちらかというといずれも書誌学上の理由によるのである。

IV 「チェンバーズ問題」解明への糸口

『百科全書』の前史とも呼べる重要な時期に関する以上の根本問題に対して，筆者が提案したいのは，以下のような手順による解決へささやかな糸口である。

まず，イーフレイム・チェンバーズ『サイクロピーディア』諸版本の調査が大前提になろう。Lael Ely Bradshaw が既出の論文末尾に付した，外国語の翻訳を含む詳細な版本リストによると[21]，『百科全書』の『第一趣意書』が配布された1745年前までに刊行されている『サイクロピーディア』の版本は7種類あり，1：1728〔1727〕(London)，2：1738 (London)，3：1738〔1739〕(London)，4：1740 (Dublin)，5：1741 (London)，6：1741-1743 (London)，7：1742 (Dublin) となっている。ロンドンで刊行されたものだけで5版あり，ダブリン版が2種類を数えるが，後者がどのような経緯で印刷されたかについては不明である。とりわけ，パリ国立図書館が所蔵する1742年刊行の「第5版」と称するダブリン版は，年代的に『第一趣意書』と一番近い版本であるため，諸家が注目するのは当然と言えるが，年代の近接だけでは決め手を欠いた臆断の誹りを免れえまい[22]。現在，私たちに残された唯一の解決策は，「大は小を兼ねる」式の絨毯爆撃のような作業である。すなわち，チェンバーズの初版本から1742年刊のダブリン版までの七つの版本すべてに掲載された四項目の英文テクストを，『第一趣意書』のフランス語テクスト，さらには『百科全書』本文における当該テクストと厳密に比較照合することではないだろうか。

次に，その肝心の『趣意書』であるが，慶應義塾大学三田メディア・センターは1996年に『第一趣意書』のオリジナルを購入している。この原本を見ると，そこにサンプルとして掲載されている四つの項目の見出し語は，フランス語で以下のように訳されている。《Atmosphère》，《Fable》，《Sang》，《Teinture》。英語原文ではそれぞれ《Atmosphere》，《Fable》，《Blood》，《Dying》である。イニシヤルだけを取り出してアルファベット順に並べれば，ABDF となり，これらの項目がチェンバーズの2巻本の第1巻のみから選ばれていることは明らかである。このフランス文をチェンバーズの諸版本の当該項目原文と照合し，ディドロたちが（あるいは彼ら以前にミルズやゼリウスたちが）英国モデルのどの版を翻訳底本としたかを突き止めることで，少なくとも四項目についての生成過程の復元と，相互の異同を手掛かりにしたさまざまな解釈が可能

になるのではないだろうか。

『第一趣意書』の原本は，フォリオ版でタテ385mm×ヨコ235mmの紙6枚，12ページの冊子である。タイトル・ページには，これが英国のチェンバーズ『サイクロピーディア』からの翻訳であることが明記されている。銅版画付き，予約制で，版元はル・ブルトン，1745年となっている。3ページから8ページまでがいわゆる趣意文であり，そこでは英国の先達の偉業とその内容が事細かに紹介される。チェンバーズの事典がたんなる辞書ではなく，科学分野における成果報告書であることも強調されている。4ページから5ページにかけて，『サイクロピーディア』序文からの長大な引用があり，それを受けて『サイクロピーディア』の全項目がある種の系統図に従って配分・配置されており，項目間は参照システムによって結ばれあっていることが指摘される。その一例として，趣意書末尾に訳出される項目《Atmosphere》をめぐる諸概念のネットワークが紹介される。6ページには原書にある知識の分類図の仏訳が印刷されている。分類図は左から右へと枝葉を広げ，右の末端で計47の主要項目に分かれる。脚注では，その内から7項目（Théologie, Physique, Médecine, Chimie, Astronomie, Architecture, Poésie）が選ばれ，それぞれの下位区分や類縁観念が列挙される。趣意文最後の8ページでは，著者は図版の問題に触れ，チェンバーズでは本文中に挿入されていた図版を別巻にまとめることで，本文の項目から項目への参照行為を強いられる読み手の便宜を図った旨述べている。同ページの下半分では，予約購読者のための条件が提示され，さらに予約を受け付けるヨーロッパ64都市の書籍商がアルファベット順に紹介されている。残り4ページは先にも述べた試訳見本が4項目にわたって引用されている。以上が慶應義塾大学所属本『第一趣意書』の素描である。

V　項目《Atmosphere》

紙数の関係でこれ以上細かい記述は出来ないが，少なくとも『第一趣意書』に試訳として掲載された4項目中，英仏両語ともアルファベット順で

最初にくる「大気」(Atmosphere/Atmosphère) の冒頭部分について，ささやかな比較作業の成果の一端を紹介することは許されよう。すでに述べたように，項目「大気」は『第一趣意書』の趣意文中でも，チェンバーズが得意としていた諸概念の相互連鎖関係のネットワークをよく体現する項目として特別に扱われ，また協同編集者ダランベールが『百科全書』本文第3巻（1753年刊）への序文で言及している，いわくつきのテクストなのである。ダランベールはこう書いている。

L'article ATMOSPHERE est un des quatre que le projet de la Traduction de Chambers offrait pour modèle. Il a été conservé dans l'Encyclopédie Française avec deux additions de quelque conséquence. Nous supplions nos lecteurs de le comparer avec une foule d'autres articles, et de juger. Nous voudrions engager jusqu'aux détracteurs les plus ardents de cet Ouvrage à essayer du moins le parallèle des deux Encyclopédies. C'est une invitation qu'on nous permettra de leur faire en passant, et nous croyons devoir à la vérité, à nos Collègues, à notre nation, et à nous-mêmes[23].

ダランベールによれば，項目「大気」はフランス版『百科全書』の英国モデルに対する独自性，その距離や優越を証立てる何よりの資料であることになる。恐らくダランベールやディドロが大きな役割を与えられていない『第一趣意書』で，すでに先輩編集者たちが特別な意味を認めている項目「大気」に対して，改めて自分たちの手になる大きな改善や増補を強調しておきたいという，若いダランベールの自負のようなものさえそこには感じ取れる。今，筆者の手元にある項目「大気」に関する6種類の資料を，テクスト冒頭の数行について照合してみよう。それらの資料とは，1）チェンバーズ1728年版，2）チェンバーズ1738年ロンドン版，3）チェンバーズ1741年ロンドン版，4）チェンバーズ1742年ダブリン版，5）『第一趣意書』(1745年版)，6）『百科全書』本文第1巻（1751年版）であ

る。

1) ATMOSPHERE, ATMOSPHÆRA, an Appendage of our Earth ; consisting of a thin, fluid, elastic Substance, call'd *Air*, surrounding the Terraqueous Globe, to a considerable Heighth. See EARTH[24].

2) ATMOSPHERE, ATMOSPHÆRA, an appendage of our earth ; consisting of a thin, fluid, elastic substance, called *air*, surrounding the terraqueous globe, to a considerable height. See EARTH[25].

3) ATMOSPHERE, ATMOSPHÆRA, an appendage of our earth ; consisting of a thin, fluid, elastic substance, called *air*, which surrounds the terraqueous globe to a considerable height, gravitates towards its centre, and on its surface, is carried along with it, and partakes of all its motions both annual and diurnal. See EARTH[26].

4) ATMOSPHERE, ATMOSPHÆRA, an appendage of our earth ; consisting of a thin, fluid, elastic substance, called *air*, which surrounds the terraqueous globe to a considerable height, gravitates towards its center, and on its surface, is carried along with it, and partakes of all its motions both annual and diurnal. See EARTH[27].

5) ATMOSPHERE, une dépendance de notre terre, qui consiste en une substance subtile, fluide, élastique, que nous appellons *Air*, & qui entoure le Globe terrestre jusqu'à une hauteur considérable ; qui gravite vers le centre & sur la superficie de ce même Globe ; qui est amené avec lui le long de sa route, & participe de tous ses mouvemens, soit annuels, soit journaliers. *Voyez* TERRE[28].

6） ATMOSPHERE, s.f. (*Phys.*) est le nom qu'on donne à l'air qui environne la terre, c'est-à-dire à ce fluide rare & élastique dont la terre est couverte partout à une hauteur considérable, qui gravite vers le centre de la terre & pese sur sa surface, qui est emporté avec la terre autour du soleil, & qui en partage le mouvement tant annuel que diurne. *V*. TERRE[29].

冒頭の数行だけでも，すでに六者は興味深い相違をお互いに際立たせている。まず，1)と2)であるが，この初版と第2版との間には，前者が用いているイニシアルが後者ではことごとく小文字に置き換えられている点を除くと，あとは call'd が called に，Heighth が height に変更されているだけで，実質的には同文である。筆者は第3版を参照しえていないが，手持ちの資料で変化が見られるのは第4版の3）とダブリン版の4）で，この両版には，それまでにない《gravitates towards its centre, and on its surface, is carried along with it, and partakes of all its motions both annual and diurnal.》という一行が挿入されている。この増補は5）の『第一趣意書』にも訳出されているから，このことからも『趣意書』が翻訳底本としたのがチェンバーズの初版ではなく，2） 3） 4）ないしはそれ以降の版を含む後版のどれかであることは一目瞭然である。面白いことに，3）と4）の両版同士にはたった1カ所しか異同がなく，それは centre（1740）の綴りが center（1741）に変わっている点だけであり，そうなると必ずしも1742版のみを特別扱いして，『第一趣意書』の底本と断定することは出来なくなってくる。

さらに5）を『百科全書』本文第1巻（1751年版）収録の項目テクスト6）と比較してみよう。たしかにダランベールの主張するように，6）はもはや英語原典からの忠実な翻訳と呼べる段階ではなく，フランス側独自の自由訳になっていると言えないこともないが，しかし逆に考えれば，これはダランベールたちのチェンバーズに対する負債の大きさを立証する資料にもなりえていることが分かるのではないだろうか。というのも，この

僅か数行が2）3）ないし4），あるいはそれに近接したいずれかの版の英語文を出発点として起草されたものであることは，読み比べてみれば火を見るよりも明らかだからである。本項目のもっと先の部分を読んでいくと，ダランベールが自負するように，フランス側は英国モデルを大きく超えて，独自の調査や研究に基づく大規模な補遺，増補を加えていることが明らかになるが，そのことはチェンバーズが1751年の時期においてさえ，ディドロたちにとって依然頼りになるお手本たりえたという事実と矛盾するもでのではない。

本論文では項目「大気」の冒頭の数行しか扱うことができなかったが，この方向で『第一趣意書』に収録された四項目関係諸版の徹底照合を続けていくことにより，いずれはフランス『百科全書』初期段階において使用されたチェンバーズの版本を同定し，さらにはチェンバーズ本の『百科全書』への寄与や影響関係の全体が徐々に浮き彫りにされてくるのではないだろうか。

注

（1） 主だった研究書や概説書で，『百科全書』の前史について触れているページを初版の年代順に紹介しておく。Joseph Le Gras, *Diderot et l'Encyclopédie*, Editions Edgar Malfère, 1928, pp.31-38; Franco Venturi, *Le Origini dell' Encyclopedia*, Piccola Biblioteca Einaudi, 1963(1946), pp. 26-37（邦訳：フランコ・ヴェントゥーリ『百科全書の起源』，大津真作訳，法政大学出版局，1979年，19～36ページ）；Jacques Proust, *L'Encyclopédie*, Armand Colin, 1965, pp.47-49（邦訳：J. プルースト『百科全書』，平岡昇・市川慎一訳，岩波書店，1979年，51～54ページ）；Arthur M.Wilson, *Diderot Sa vie et son œuvre*, traduit de l'anglais par Gilles Chahine, Annette Lorenceau, Anne Villelaur, Laffont/Ramsay, « Bouquins », 1985 (édition originale 1972), pp.61-70; John Lough, *The* Encyclopédie, Longman Group Ltd, 1971, pp.7-16; Madeleine Pinault, *L'Encyclopédie*, Collection Que sais-je ?, Presses Universitaires de France, 1993, pp.14-16.

（2） *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*...(Prospectus de 1751), p.2-a.

(3) John Lough, « The *Encyclopédie* and Chambers's *Cyclopaedia* », *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 185, 1980, pp.221-224.

(4) *Ibid.* pp.223-224.

(5) 実際は1750年に配布されていたが，タイトル・ページが1751年となっているので，本稿でもその年代を表記することにする。

(6) Douglas H. Gordon and Norman L. Torrey, *The Censoring on Diderot's* Encyclopédie *and the Re-established Text*, Columbia University Press, New-York, 1947.

(7) John Lough, « Le Breton, Mills et Sellius », *Dix-Huitième Siècle*, n°1, 1969, Editions Garnier Frères, p.267.

(8) インターネットによる検索の結果，筆者は最近同じアメリカのヴァージニア大学のサイトに，The Douglas H. Gordon Collection of French Books なるものがあることを発見した。これによって，事態はますます紛糾する。同コレクションに関する英語記事を読むと，Gordon 教授はバルチモア大学からヴァージニア大学に移籍し，それに伴って同氏のコレクションも異動したものらしい。そして同じ記事には同コレクション最大の目玉として『百科全書』全巻が紹介され，さらに以下のような記述を読むことができる。

« Volume One contains the original sanguine wash drawing by C. N. Cochin of the engraved frontispiece and an early 1745 prospectus announcing a five-volume work to be translated from the English Universal Dictionary (1742) of Ephraim Chambers, a plan subsequently discarded when Diderot joined the multi-volume project. This unique set of the Encyclopedie is bound in full red contemporary morocco with elaborate arms (unidentified) gilt-stamped on the covers. »

直ちに慶應義塾大学図書館を通じてヴァージニア大学に問い合わせた結果，『第一趣意書』の所在を確認することは出来たが，ページ数の点などで，それが確実に本物の『第一趣意書』であるという確証をまだ得るに至っていない。

(9) Joseph Le Gras, *op. cit.*, p.33, note, 1. Le Gras はこの注でこの資料の分類番号まで挙げているが（Bibl. Na. Mss. Fr. 22.069. f° 266），これについては未詳である。

(10) 注 8 に紹介した The Douglas H. Gordon Collection of French Books に関する英文の記述では，奇妙なことに『第一趣意書』が謳っている翻訳企画がチェンバーズの1742年版に基づくものであるということが，何の証拠もなく明記されている。この1742年版は，ロンドンではなく

ダブリンで刊行された版本であり，パリの国立図書館が所蔵していて，「第5版」という記載が認められるが，この版数や出版地を含めて，ディドロたちが準備していたフランス『百科全書』とこのダブリン版との関係はまったく不明である。実は，1932年にパリの国立図書館で開催された展示会のカタログ（*L'Encyclopédie et les encyclopédistes*, exposition organisée par le Centre international de synthèse, Bibliothèque Nationale, 1932）においても，フランス『百科全書』に影響を与えた先行作品として紹介されているのは，チェンバーズの初版本ではなく，このダブリン版なのである（p. 18）。また，モンペリエのジャック・プルースト教授からの来信によると，Marie Leca-Tsiomis が1995年にパリ大学に提出した博士論文 *Ecrire* l'Encyclopédie では，パリの国立図書館所蔵のダブリン版が使われているらしいが，著者は同版がゼリウスの翻訳底本であるとは言明していないそうである。なお，この博士論文は近く *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century* 誌上に掲載予定とのことである。

(11) *Mémoire pour Pierre-Joseph-François Luneau de Boisjermain, souscripteur de l'Encyclopédie*, 1771.

(12) *Ibid*., p. 4.

(13) ヴェントゥーリ，前掲書邦訳，20ページ。

(14) 同書，21ページ。

(15) John Lough, *The Encyclopédie*, Longman Group Ltd, 1971, p.11.

(16) Lael Ely Bradshaw, « Ephraim Chambers' *Cylopaedia* », in *Notable Encyclopedias of the Seventeenth and Eighteenth Centuries : Nine Predecessors of the Encyclopédie*, edited by Frank A. Kafker, *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 194, 1981, pp.123-140.

(17) Frank A. kafker, « The *Encyclopédie* in relation to the nine predecessors », *ibid*., pp.223-237.

(18) 同じ著者に類似の書物（*L'Angleterre dans la pensée de Diderot*, Paris, 1957）があるが，未見である。刊行年代が古いので，本書はその焼き直しとも考えられ，そうなると1980年代にデディヤンを位置づけるのは不適切であるかもしれない。

(19) Charles Dédeyan, *Diderot et la pensée anglaise*, Firenze, Leo's Olschki Editore, 1987, p.51.

(20) Stephen Werner, « La modernité de Chambers », in Annie Becq (sous la direction de), *L'Encyclopédisme*, Actes du Colloque de Caen 12-16 janvier 1987, Klincksieck, 1991, pp.161-167.

(21) Lael Ely Bradshaw, article déjà cité, pp.138-139.

(22) 注10を参照のこと。

(23) « Avertissement des éditeurs », *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*..., Texte, t.3, 1753, p.v.

(24) E. Chambers, *Cyclopædia : or, an Universal Dictionary of Arts and Sciences*, vol.I, London, 1728, p. 167.

(25) E. chambers, *Cyclopædia : or, an Universal Dictionary of Arts and Sciences*, vol. I, London, 1738.〔この版にはページ付けがない〕

(26) E. Chambers, *Cyclopædia : or, an Universal Dictionary of Arts and Sciences*, vol.I, London, 1741. 〔この版にはページ付けがない〕

(27) E. Chambers, *Cyclopædia : or, an Universal Dictionary of Arts and Sciences*, vol.I, Dublin,1742.〔この版にはページ付けがない〕

(28) *Encyclopédie, ou Dictionnaire universel des arts et des sciences*... [Prospectus de 1745], p.9.

(29) *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*..., Texte, t.1, 1751, p.819-b.